

選者 川口孤舟

出席者 柿崎忠彦 川口孤舟 久米五郎太 在間千恵 佐藤ただしげ 豊田穰 西澤國護

長谷見敏 古川百合子 星田啓子 山崎亜也

投句・選句 今井紀久男 熊谷くにお 後藤とみ子 小早健介 朱牟田恵洲 高橋康敏 土谷堂哉

中川雅夫 福島正明 古田昇 山田けい子 山内天牛 渡邊盛雄

選句のみ 伊賀山そらお 梅崎哲雄(表記「くす」) 重枝考岳 庄司龍平 高橋清子

橋口隆 宮内規雄 山本三恵

【互選句】 ○は選者の特選 ◎は孤舟選者の選

八点 命ある今朝の実感秋澄める 健介 (くす・○孝・龍・ゆ・び・允・規・盛)

編み笠のルージュ一瞬風の盆 堂哉 (○くす・千・龍・○康・啓・亜・け・三)

七点 戸隠の山を従え蕎麦の花 けい子 (忠・く・た・清・康・び・天)

六点 また転び妻の溜息身に入みて 紀久男 (忠・く・健・と・た・盛)

コスモスの揺れて風すむ里と知る とみ子 (忠・孝・雅・び・啓・規)

◎ジャズに酔ひワインに酔ひて月の夜 堂哉 (○そ・くす・孤・健・國・昇)

満月の揺らぐ影見ゆ瀬戸の海 ゆたか (そ・くす・た・清・允・昇)

波の音ばかり無月の日本海 けい子 (そ・五・清・正・百・天)

五点 山門の額をはみ出す秋比叡 五郎太 (恵・清・び・昇・三)

篠笛と水琴の音あり秋茶会 けい子 (健・と・千・恵・盛)

コスモスやポニーテールの駆けてゆく 康敏 (く・堂・國・昇・規)

浮雲の白さ軽さも秋の空 國護 (くす・孝・た・隆・規)

さんざめく田舎の駅や風の盆 びん (五・ゆ・雅・允・亜)

秋の陽にプリズムとなりガラスペン 啓子 (紀・千・恵・け・亜)

四点 文旦を剥くや拇指怒らして 孤舟 (五・恵・隆・三)

やうやつと小鳥来る木に育ちたり とみ子 (紀・千・○堂・清)

今日の月戦禍の街の瓦礫にも 康敏 (く・健・ゆ・百)

ひぐらしの鳴いて庭先とばりおり ゆたか (そ・び・正・亜)

コオロギや三和土の隅で秋告げる 百合子 (そ・○た・國・啓)

椿の実ぱかんと爆せていのち産む 全 (五・千・康・天)

秋の夜の遺品整理や父母の恩 昇 (と・堂・隆・百)

三点 長き夜や喪主への手紙止まる筆 忠彦 (くす・と・堂)

竹春の林ひかりの侏儒跳ぬる 孤舟 (恵・康・○三)

パソコンの中身軽くし秋の雲 五郎太 (清・正・昇)

フルートの音色軽やか秋を聴く
 ◎秋風や更地となりて代替わり
 颯々と色なき風や戌辰墓碑
 ◎義太夫の絞り出す節秋暑く
 カフェラテにハート描きて敬老日
 めくばせや秋の夜弾むジャズトリオ
 街裏の暗きに沁むる胡弓の音
 吾亦紅身の焦ぐるほど恋してふ
 老夫婦夕餉をたのしむとろろ汁
 虎伏して十八年や天高し

五郎太 (康・國・規)
 千恵 (孤・康・百)
 くに お (五・孝・〇允)
 恵洲 (孤・け・三)
 康敏 (と・千・〇盛)
 堂哉 (紀・〇と・龍)
 びん (孝・昇・天)
 啓子 (紀・五・孝)
 天牛 (忠・く・ゆ)
 盛雄 (紀・忠・け)

二点

◎猿翁逝き冥土で宙乗り秋彼岸

(左團次・猿翁・小生は同い年)

カラオケに軍歌低唱敬老日
 異常なり気配も見せぬ曼珠沙華
 白妙の蕎麦の花咲く会津かな
 甘柿の一顆一顆に嘴の跡
 秋刀魚焼き噂も煙に巻かれけり
 朝夕の風ひっそりと秋を告げ
 哀愁の調べ静かに風の盆
 ◎夏ゆきてダークダックス今は亡し
 ◎こんがらがる思考の糸や夏の果
 ◎ふるさとの空へ水尾引く鰯雲
 喘ぎつつ坂のてっぺん鰯雲
 山は暮れ二階の灯る盆用意
 濃き赤の目立つ今年の百日紅
 さやけさや暫く振りにブラアムス
 萩眺め零るも散るも選び得ず
 一塩の秋茄子を添へ白ワイン

紀久男 (孤・け)
 全 (健・亜)
 全 (龍・雅)
 忠彦 (ゆ・び)
 孤舟 (紀・恵)
 全 (盛・天)
 全 (そ・國)
 ただしげ (允・規)
 全 (孤・〇正)
 恵洲 (孤・啓)
 正明 (孤・五)
 昇 (た・ゆ)
 百合子 (忠・け)
 びん (雅・正)
 啓子 (〇龍・正)
 全 (啓・三)
 盛雄 (堂・國)

一点

十八年ぶり虎狂(とらきち) 一家新酒干す

紀久男 (盛)

◎鎮魂の炎の花や曼珠沙華

忠彦 (孤)

小鳥来る森は混成合唱団

孤舟 (堂)

小野和邇と古き名の土地秋深む

五郎太 (亜)

光る田に秋をながむるひとり旅

全 (雅)

頬なでる風も変わりぬ秋そこに

全 (龍)

酒旨し江戸紫に揚がる茄子

全 (正)

初秋刀魚庶民に届かぬ高値かな

ただしげ (隆)

播磨屋の芸をつなぐや秋芝居

全 (紀)

暑き秋場所肩で息する勝ち力士

恵洲 (紀)

(貴景勝が勝ってよかった)

瀬戸の海船より望む天の川

ゆたか (允)

異天候しまう朝顔と話す朝 雅夫 (三)
 早落葉天変憂え庭を掃く 全 (百)
 秋刀魚焼く旬の匂いに脂のり 國護 (百)
 夜更けてじつくり読書せず虫と 全 (雅)
 ◎風に乗りかすかに届く秋の鐘 全 (孤)
 彼岸とも思えぬ暑さ続きけり 全 (隆)
 暗き夜の更けゆくままに風祭 びん (く)
 ◎若衆の風の盆唄笠隠れ 全 (孤)
 デパートの労組がスト秋の風 正明 (隆)
 夕闇に影絵となりぬ鉄塔は 百合子 (天)
 秋空や前行く車のリアウインドウ 啓子 (紀)
 百舌鳥来たる目に楽しきは四頭身 亜也 (け)
 山の端にさ牡鹿の鳴き生々し 盛雄 (啓)
 もの忘れを止める新薬敬老日 全 (〇健)

【句 評】

八点

命ある今朝の実感秋澄める

健介

孝岳さん・・・秋の早朝、目覚めたとき、澄み渡る空気の中で生きていることを実感する。その気持ちは、大病を経た僕にはよくわかります。

ゆたかさん・・・老いた身の命ある有難さが見事に詠まれています。

允章さん・・・大きく深呼吸している作者が見える。

編み笠のルージュ一瞬風の盆

堂哉

千恵さん・・・踊り手の深くかぶられた編み笠から鮮やかなルージュの唇が一瞬間見られた。そこに作者の視線が釘づけになりましたね。

康敏さん・・・踊り子達が一斉に顔を上げた。その瞬間編み笠の間から色濃きルージュが、そこに胡弓の音が重なる。

啓子さん・・・目深に被る半円形の編み笠。動きにつれて一瞬見えた濃い紅色のルージュに思わず胸を衝かれる作者。風を含めた一連の動きと心の動きが鮮明に伝わります。

亜也さん・・・笠のうちを覗きたい思い。「一瞬」が絶妙。

七点

戸隠の山を従え蕎麦の花

けい子

くにおさん・・・戸隠山の麓に蕎麦畑が白く一面に広がり、戸隠山を従えているかのようだ、という作者の感慨。雄大な初秋の景が眼前にある。

ただしげさん・・・戸隠の山裾の蕎麦畑、山を従えとは雄大で、面白い。

康敏さん・・・長野県の寒暖差の激しい高地で栽培された戸隠そばは味が良く、岩手のわんこそば、島根の出雲そばと並んで日本三大そばと言われる。

天牛さん・・・戸隠の大和は雄大ですね。蕎麦の花今がさかりですね。

六点

また転び妻の溜息身に入みて

紀久男

くにおさん・・・奥さんが、今度転んだら骨折するかも知れないという不安。同時に自分自身が転んで骨折などしないようにと戒めている。「身に入みて」が利いている。

とみ子さん・・・奥様の心配されるお気持ちに同感いたします。お大事になさってください。
ただしげさん・・・明日は我が身と理解。

盛雄さん・・・私もドクターから「転倒には十分注意なさい」と言われ続けております。

中七、下五が全てと思います。

コスモスの揺れて風すむ里と知る　とみ子

啓子さん・・・僅かな風でもコスモスは揺れる。風すむ里とは・・・たいへん美しい響きの中七！

ジャズに酔ひワインに酔ひて月の夜　堂哉

孤舟選者・・・観月は日本古来の伝統だが、その日に西洋由来のジャズとワインに酔い痴れる滑稽さ。

昇さん・・・まさに至福の時間。ジャズ大好き人間としては、ずっとこのまま酔っていた

い。加山雄三の歌じゃないけど、ボクは幸せだなく気分。

満月の揺らぐ影見ゆ瀬戸の海　ゆたか

ただしげさん・・・満月が瀬戸内の小さな波に揺らいで影を映している。この光景が懐かしい。

允章さん・・・今回出句されている「瀬戸の海・・・天の川」は空の天の川を見て、この句は

海に写る満月を観て感動している。いずれも大自然の美しさ。

波の音ばかり無月の日本海　けい子

百合子さん・・・新潟の海の光景、日本海の波音は強く荒々しい、まして無月となれば。

天牛さん・・・日本海だから波の音が効いていますね。

五点

山門の額をはみ出す秋比叡

五郎太

恵洲さん・・・山門を比叡の景の額と見たところが面白い

篠笛と水琴の音あり秋茶会　けい子

とみ子さん・・・大気の澄んでいる秋の趣が、よく感じられました。

恵洲さん・・・この清（さや）かな音が秋茶会に相応しい。

盛雄さん・・・良い趣味をお持ちで、人生にゆとりを感じさす佳句です。

コスモスやポニーテールの駆けてゆく　康敏

くにおさん・・・コスモスに見え隠れしながらポニーテールの少女が元気にコスモスの中を走り

抜けてゆく。かろやかなコスモスの花と可憐な少女とがよくマッチしている。

堂哉さん・・・コスモスも揺れる、ポニーテールも揺れる

浮雲の白さ軽さも秋の空

國護

ただしげさん・・・秋の空の白い浮雲、ふわっと見える様子を上手く表現している。

隆さん・・・9月、母の遺骨を抱いて機上の人になった。下に見る雲海は黄泉の平原をして

私を釘付けにした。

さんざめく田舎の駅や風の盆

びん

五郎太さん・・・青葉会で山間の八尾吟行を催したのは、ずいぶん前のことです。「風の盆」は

繭の買ひ付けで賑わった往時や忍ぶ恋など、イメージ豊かな季語。今回は一連

の句を懐かしく、楽しみました。

ゆたかさん・・・風の盆の風景ではなく、風の盆の行事に多くの人が集まったことを詠まれたこ

とに注目しました。

允章さん・・・昔、青葉会の吟行で連れて行ってもらった風の盆を思い出す。万里子先生も

お元気だった。

亜也さん・・・踊りではなく駅に着目したオリジナリティ。

秋の陽にプリズムとなりガラスペン

啓子

千恵さん・・・ガラスペンが光に反射してプリズムみたいにキラキラしている一瞬を切り取ったのですね。映像が浮かびます。

恵洲さん・・・ガラスペンで、今でもあるのですか。(昔、中学のペン習字で使った覚えあり)懐かしい。

亜也さん・・・窓際のデスクの上の七色がありありと目に浮かぶ。

四点

文旦を剥くや拇指怒らして

孤舟

五郎太さん・・・皮が厚い文旦、ザボンは剥くのが一仕事。皮の砂糖漬けは風雅です。

恵洲さん・・・文旦の分厚い皮を指に力を籠めて剥く感じが「怒らせて」でわかります

隆さん・・・皮の厚さが抵抗するか。皮汁は風呂場のウロコ取りに最適な汁。

やうやつと小鳥来る木に育ちたり

とみ子

堂哉さん・・・永年の慈しみが嬉しい結果に繋がりました！おめでとうございます。

今日の月戦禍の街の瓦礫にも

康敏

くにおさん・・・荒涼とした異国の戦禍の街。今、自分の仰ぎ見ている仲秋の名月がその街の瓦礫を照らしている。異国の戦禍を思い、世界の平和を希求する作者の気持ちが「今日の月」に凝縮している。

ゆたかさん・・・ウクライナの惨状でしょうか、哀しいことです。

百合子さん・・・今日の月を愛でながら、ふと瓦礫の街、戦禍の街に思いを巡らす感性！

ひぐらしの鳴いて庭先とばりおり

ゆたか

亜也さん・・・声と景色の組合せで、夕暮れの情感がよく伝わってくる。

コオロギや三和土の隅で秋告げる

百合子

ただしげさん・・・三和土のあった古い実家の家を思い、懐かしく思い起こした。

啓子さん・・・一見してコオロギが漢字表記されている方がより雰囲気が出ただろうなあと感じましたが、三種類の材料を混ぜ合わせて造る三和土は昔はよく見掛けましたのでその手触りも懐かしく、穏やかな景を感じていただきました。

※康敏さん・・・こおろぎと秋の季重なり。尚、俳句では動植物の名は、「ひらがな」または「漢字」で表示します(外国語名は除く)。×コオロギ↓ ○こおろぎ(旧仮名こほろぎ)又は蟋蟀。

※びんさん・・・きれいな風景ですね。でも、コオロギはなぜカタカナに？(カタカナは外来語に絞るのを原則とすべしと私は学んだ・・・)、それと「季重なり」では？ “や”で切れない？ 三和土を持つ現代の家？などの問題性あり、これらをまとめて、こうしてみるのはいかがでしょうか。「暮れゆけば蟋蟀を聞く町にすむ」

椿の実ぱかんと爆ぜていのち産む

百合子

千恵さん・・・実が爆ぜるとは正に子孫を残すためのもの。その瞬間を“ぱかんと”とオノマトペで表現されているのも臨場感ありますね。

康敏さん・・・実が弾け黒くて丸い種子には生命力を感じる。

参考「椿の実割れてこの世に何の用 市掘玉宗」作者は禅僧。

天牛さん・・・ぱかんと音がするか聴いたことがないのでわかりませんが、いいですね。

秋の夜の遺品整理や父母の恩

昇

堂哉さん・・・遺品の整理は誠に厄介です。少しずつ自分の物の整理に努めています。下五が良いですね。

隆さん・・・澄んだ秋の夜を遺品整理で埋める。父母への恩は無限大。
百合子さん・・・両親の遺品に触れると品々から交々の想いが湧き、親とはありがたい、全く同感です！

三点

長き夜や喪主への手紙止まる筆

忠彦

堂哉さん・・・喪主が配偶者であれ、子供さんであれ生前の付き合いのことや慰め、励ましなど辛いですね！

竹春の林ひかりの侏儒跳ぬる

孤舟

恵洲さん・・・木漏れ日のちらちら動く光？を侏儒（こびと）が撥ねているようだ、という見立てがよい。

康敏さん・・・幹に艶の増した秋の竹林、日が当り光の小人が跳ねて遊んでいる。メルヘンチックな世界。

三恵さん・・・異次元空間を想像します。ひかりの点滅を侏儒に見立てていらっしやるのでしょうか。西洋風のメルヘンチックな森の妖精と俳句ならではの視点のミックス。堪能させていただきました。

フルートの音色軽やか秋を聴く

五郎太

康敏さん・・・猛暑の長い夏だったが、フルートの柔らかく澄んだ音色に秋を感じた。

秋風や更地となりて代替わり

千恵

孤舟選者・・・高齢化による空き家増加が問題になっている。

康敏さん・・・住宅街の更地。両親の住んでいた古い家を壊し、息子が新居を建てるようだ。実は隣家も更地になっています。

百合子さん・・・近所でもよく見る光景。秋風と代替わり、相俟つての無常を感じます。
颯々と色なき風や戊辰墓碑

くにお

五郎太さん・・・戊辰戦争は最後の内戦でした。「ひょうひょうと」と披講しましたが、高砂では「さつさん（つ）の風ぞ楽しむ」と謡います。それもいいと思います。

允章さん・・・日本が近代化への大きな転換点となった戊辰戦争の墓碑を、秋風が渡ってゆく感慨。

義太夫の絞り出す節秋暑く

恵洲

孤舟選者・・・余りに熱の入った口演のため、その熱気が聴衆にまで伝わって来る。

カフェラテにハート描きて敬老日

康敏

とみ子さん・・・敬老日と、カフェラテの軽さとの取合せが、私の気分ピッタリ！
盛雄さん・・・愉しさがにじみ出る一句。

めくばせや秋の夜弾むジャズトリオ

堂哉

龍平さん・・・何故かふと Miles Davis を聴いて凌いだ酷暑の夏でした。
とみ子さん・・・演奏の途中でプレイヤー同士が、目で打ち合わせする一瞬を 鮮やかに切り取られたと思います。

街裏の暗きに沁むる胡弓の音

びん

天牛さん・・・風の盆もだいぶん俗化してきましたが裏道の胡弓はいいですね。

吾亦紅身の焦ぐるほど恋してふ

啓子

五郎太さん・・・焦げ茶の小さな実をつけるワレモコウを見て、恋に憧れる句。百人一首の「我が名はまだきたちにけり」の上五は「恋すてふ」。ご本人が恋をされているのか、よくわからないところがありますが。

老夫婦夕餉をたのしむとろろ汁 天牛
くにおさん・・・とろろ汁の夕餉。老夫婦の穏やかで幸福な晩秋のひととき。
ゆたかさん・・・ご夫婦の和氣藹々の雰圍氣と、とろろ汁の取り合わせが絶妙です。

二点

猿翁逝き冥土で宙乗り秋彼岸 紀久男

(左團次・猿翁・小生は同い年)

孤舟選者・・・もうあの演技が見られないと思うと惜しまれてならない。

カラオケに軍歌低唱敬老日 紀久男

健介さん・・・低唱がいいですね、高唱ではどうもね・・・

亜也さん・・・思想ではなくて世代。

異常なり気配も見せぬ曼珠沙華 紀久男

龍平さん・・・佛さまは何時も へ八風吹不動です

白妙の蕎麦の花咲く会津かな 忠彦

ゆたかさん・・・蕎麦の花と会津の取り合わせが斬新です。

甘柿の一顆一顆に嘴の跡 孤舟

恵洲さん・・・甘くなるのを楽しみにしていたのに鳥に先取りされたのですね、きつと。

秋刀魚焼き噂も煙に巻かれけり 孤舟

天牛さん・・・最近の句は皆真面目な句が多い中で、久方振りの諧謔性に嬉しくなりました。

哀愁の調べ静かに風の盆 ただしげ

允章さん・・・三味線・胡弓などの伴奏で静かに唄い踊る風の盆。

夏ゆきてダークダックス今は亡し 恵洲

孤舟選者・・・七十年近く前から一世を風靡したダークダックスが、ゾウさんの死によりその

幕を閉じた。

正明さん・・・遠山さんが亡くなりダークダックスは無くなりました。寂しさの果てです。

故人のご冥福をここからお祈りします。

こんがらがる思考の糸や夏の果 正明

孤舟選者・・・この異常な暑さで思考能力が低下しているが、どうやら涼しくなってきた。

啓子さん・・・極端な暑さに心身が疲弊する状況と、そろそろその時期も終わってほっとする

なあという思いを、このように表現され、納得と共に感動致しました。

ふるさとの空へ水尾引く鰯雲 昇

孤舟選者・・・鰯のような形の大量の雲片が故郷へ向かって流れて行く。

喘ぎつつ坂のてっぺん鰯雲 百合子

ただしげさん・喘ぎ喘ぎ上った坂の頂き、空には鰯雲があり、ほっとしている様子が楽しい。

ゆたかさん・喘ぎつつも、坂のてっぺんまで登られた満足感でしょうか

さやけさや暫く振りにブラアムス 亜也

龍平さん・・・過去に年下の男性から「Aimez-vous BRAHMUS ?」と。訊かれた経験者の作なり

や？久しぶりに若手の元カレを想い出して。

萩眺め零るも散るも選び得ず 亜也

啓子さん・・・萩の花が咲き乱れる庭先。小さな花が散り敷きます。散る？零れる？どちら？

楽しい悩み。長閑な刻も感じます。

一塩の秋茄子を添へ白ワイン 盛雄

堂哉さん・・・洗いー

一点

十八年ぶり虎狂（とらきち） 一家新酒干す 紀久男

盛雄さん・・・小生もタイガースファンの一方の旗頭で有人諸兄姉“内祝い”を配りました。
鎮魂の炎の花や曼珠沙華 忠彦

孤舟選者・・・あの世・浄土・死などの連想に繋がる花である。

小鳥来る森は混成合唱団

孤舟

堂哉さん・・・楽しい五七五。

小野和邇と古き名の土地秋深む

五郎太

亜也さん・・・由緒ある湖西のここかしこ。

初秋刀魚庶民に届かぬ高値かな

ただしげ

隆さん・・・秋刀魚×庶民＝高値。食の値段は微妙な味がする。

瀬戸の海船より望む天の川

ゆたか

允章さん・・・さえぎるものない船上より望む天の川

早落葉天変憂え庭を掃く

雅夫

百合子さん・・・まさしく私の今年の実感、紅葉色の落葉ではなく日焼け色の落葉です。

秋刀魚焼く旬の匂いに脂のり

國護

百合子さん・・・秋刀魚の匂いに食欲をそそられ、その上あの脂の匂いが漂ってくればもう、

たまらん！

風に乗りかすかに届く秋の鐘

國護

孤舟選者・・・夕方観光客も消え静かな街に戻った。遠くから寂しそうな夕鐘の音が流れ

来る。

彼岸とも思えぬ暑さ続きけり

國護

隆さん・・・今年の十大ニュースか。「歯止めにもならぬ猛暑の秋彼岸」でも。

暗き夜の更けゆくまに風祭

びん

くにおさん・・・二十十日の夜。風の唸りを聞きながら、風がこれ以上荒れなことを念じながら

なんら打つ手もなく、ただ風の恐ろしさに身構えている作者の緊迫した心境の

一句。「更けゆくまに」の中七の措辞が上手いと思う。

若衆の風の盆唄笠隠れ

びん

孤舟選者・・・編み笠を目深に被り、踊り手の顔や表情を伺い知ることができない。

デパートの労組がスト秋の風

正明

隆さん・・・ストライキの悲哀は秋に適う。「売り尽くすスト決行と秋の空」でも。

夕闇に影絵となりぬ鉄塔は

百合子

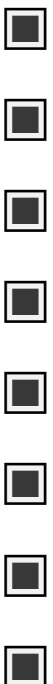
天牛さん・・・季語がわかりませんが、秋の田んぼにうつる様子がよくわかります。

※康敏さん・・・季語がありません。「鉄塔は影絵となりぬ秋の暮」では。

もの忘れを止める新薬敬老日

盛雄

健介さん・・・この句もそんな新薬もノーベル賞です。



【次回青葉会予定】

（注意！！）10月句会場所は 東五反田です！

日時：令和五年十月二十六日（木）午後一時から午後四時半

会場：東五反田 パークタワーグランスカイ 2F

◇参加者は当季雑詠5句。投句は2句まで。投句締切：十月二十四日（火）中。
◇「参加の」意向、投句は星田メール或いはFAXにて受付させていただきます。

【集会所及び会場所在地】

会場：品川区東五反田2丁目10の1「パークタワーグランスカイ」2F「コミュニケーションプラザ」

集合：12：40 JR山手線五反田駅ホーム、大崎寄りの最先端（上りエスカレーターの手前）

当日の連絡先： 孤舟選者 携帯 090 - 4076 - 5930 / 星田啓子 携帯 080 - 8870 - 8201



【青葉会報】

一、 まだ暑さの残る9月末、青葉会月例会を丸紅本社の会議室をお借りして開催致しました。世話人の紀久男さんご出席可能かと、みなさま期待しましたが、なかなか本調子にならないとのこと残念ながらご欠席でした。一方、びんさんはじめ二名のご出席を見て賑やかに、いつものように五郎太さんの温かくもすっきりした司会で、夫々の披講も楽しい句会となりました。このころはまた猛暑日も残りましたが、夏の終わりを実感できる朝夕が訪れたことから、みなさまからのご出句が一気に秋の香りを漂わせて、汗をかきつつ集まった私どもも気分はすっかり秋に染まりました。結果はご覧のとおり、健介さん、堂哉さん、けい子さんが高得点でした。佳句が多く、皆さまの選句にもご苦労の跡が見られ、票は幾分ばらけましたが句評も沢山頂戴し、楽しい誌面となりました。茲許御礼申し上げます。

三、 前回の句会報にて、みなさまからの川合万里子先生への追悼句を掲載させていただきましたが、今般、天牛さんより感謝の想いと俳句二句を頂戴致しました。茲に掲載させていただきます。

正明と万里子のダンス忘年会

つつじ見る皇居吟行万里子さん

本当に何の飾り気もない、心温まる方でした。俳句と云はずいろいろの面で教えられました。感謝に耐えません。

四、 孤舟選者新作五句

一刷けの雲の行方や薄原

夕刊の届く刻なり合歡の花

蜘蛛の囿の万事休せし獲物かな

消印は富士山頂の夏見舞

逢へばすぐ渾名で呼びぬ孟蘭盆会

五、 関係者近詠は今暫くお休みさせていただきます。

令和五年十月十四日

(了)